

新たな  
連携へ

## 産学官連携ネットワークの構築

# 特徴を活かしたネットワークの拡大

キーワード：染料・造形芸術学・心理学・メタマテリアル・地域連携

### 本事例の関係者

明星大学  
教職員

青梅市ほか自治体  
多摩信用金庫

文部科学省産学官連携  
コーディネーター

## 造形芸術学部と青梅地区の交流から

### 【要約】

本学では学長方針として「地域への貢献」が謳われている。また、多くの卒業生が多摩地域で活躍していることが特徴のひとつである。この特徴を生かして人的なネットワークを活用した組織的な地域貢献活動を強化することで、産学官連携活動を一層活性化することが可能であると考えた。しかしながら、目標を達成するためには本学単独では実現が困難な課題もあった。

コーディネーターは、学外諸機関との連携のハブとなることが好ましいと考え、学内体制の整備から着手してステップアップの目処が見ついた。

### 【きっかけ】

コーディネーターは、就任直後に青梅市と造形芸術学部との連携活動の報告会に参加した。そこで目にしたのは、頬を紅潮させて緊張気味に活動成果を報告する学生たちと同時に、熱心に耳を傾け画面に登場する街の様子に微笑む地域の関係者の方々の姿であった。このような状況を目の当たりにして、学生たちが地域に入り込んで活動することは、地域の活性化はもとより教育活動の高度化にも大いに寄与できることを確信した。

コーディネーターは、関係者の協力を得て身近な連携活動の実績を積み重ねながら、連携のハブとなることを目指して具体的な方策を探った。

### 【段取り・ポイント】

#### ●人文芸術系のシーズに基づく連携活動と展開

①理工学部教員が合成に成功した貝紫染料を利用した「紫MOVE」が東京都のオリンピックムーブメント推進事業として採択され、青梅市から受託事業として造形芸術学部がイベントを企画推進した。そのような活動の中から、本学の卒業生でもある染色工芸家から、合成貝紫を染色材料として普及・量産化するとともに、他大学と連携して服飾文化的な観点からも再構築することなどが提案された。連携拠点としてのシナリオと参加者の役割分担などの詰めが必要である。

②人文学部心理・教育学科では、東京都からの委託事業として、他大学の協力も得て「ひきこもりに関する実態調査と対策の研究」を継続している。継続することにより、特徴あるデータが蓄積されている。成果を活用してフォーラムを開催するとともに、相談室を開設する計画もある。

#### ●理工系のシーズに基づく連携活動と重点プロジェクトの推進

①多摩信用金庫との包括連携協定に基づいて具体的な活動計画を立案するために協議した。多摩信金のクライアント企業のニーズ情報をヒアリングし、特徴のある中小企業が多く、連携の方法を工夫すれば成果につながることを期待された。

②TAMA-TLOの協力を得て、JST新技術発表会でメタマテリアルの応用技術開発を紹介し、多くの有力企業から注目された。早期に期待に応えるために、学外との連携により人的・資金的な研究リソースを充実しマルチクライアントの開発体制を構築する準備を進めている。

### 【成果・結果や活動後の変化】

平成21年度から新たな学内拠点として「連携研究センター」の設立に向けて、ポリシー・規定類の整備作業が進んだ。課題に応じて産業界を含む学外との協力体制を構築する機運が醸成され、拠点形成の動きが始まった。



「紫MOVE」活動

### 地域連携先の事例

自治体等

・青梅市他9機関

地域企業など

・Y精機他13社

金融機関

・多摩信金ほか

大学等研究機関

・群馬大他9機関

TAMA-TLO

TAMA協会

## 成功の事例

### 街が賑わい大学も元気に

#### ●街の主役になった学生たち

学生は、適切な動機付けと目標を明示することによって、それぞれの才能を発揮できることに感動を覚えていた。学生が学外に出て地域の人達との交流を持ちながら一つの目的を達成することは、学生を活性化すると同時に街の人たちも元気にする効果がある。

大学・学生が地域に貢献できるとともに、地域が学生を育成してくれることを実感し、教育の場を街まで拡大することを教育活動の仕組みとして取り込むことで、価値のある特徴的な大学教育が体系化できると確信した。

#### ●大学を頼りにしている地域の人たち

産業界はもとより地域の金融機関や市役所・商工会議所・観光協会などの地域の多くの機関が、大学の知識と知恵に期待すると同時に、学生の若さと斬新なアイデアを大いに期待していることがわかった。

自治体などとの地域連携活動はもちろん技術開発課題でも、多くの卒業生が大学の活動に注目している。将来的には寄付など自発的な貢献につながるような良好な関係への発展が期待される。

## 新たな 連携へ



青梅市・看板製作

## 失敗の事例

### 夢に向かって組織を超えた連携が不可欠

#### ●学内にはアイデアはあっても、リソースが不足している

大学のシーズが評価され共同研究や受託研究を進めるときに、近年の少子化・理工離れ現象とも関連して、十分な研究工数を確保できない課題がある。せっかくの研究費も人件費に費やされてしまい、資金獲得が目的化してしまうくらいがある。適切なシード資金と柔軟な管理の仕組みが期待される。

当面の手段として、学内はもとより学外との組織的な交流による、タスクフォースとしての連携拠点の形成が効果的である。

#### ●勇気を持って飛び出す仕掛けが必要

知的財産の機関管理を始めとして組織的にプライオリティを確保・保証する仕組みやタスクに応じて柔軟に組織間を移動できる仕組みなど、日本人のメンタリティに適した仕組みの構築が必要である。

イノベーションにつながるようなプレコンペティティブな課題については、課題の特徴にあわせて新規に先導的な研究開発体制を構築することが必要である。

### 成功と失敗の 分かれ道

すべて自前で調達可能な範囲内で出来ることには限りがある。

新たなスキームによる活動がイノベーションにつながる。

## 産学官連携の新たな展開に向けた提言

### 全員が広域コーディネーターになろう

文部科学省の産学官連携コーディネーターは、社会の期待にこたえて各大学を拠点に活動し成果を挙げてきた。近年は、コーディネート活動の高度化として「ネットワーク活動の強化」が期待されている。

ネットワーク活動は、信頼関係に基づく人的なつながりが基本になる。産学官連携体制の構築は模範となる事例も増えて、知財管理や契約事務などに経験豊富な人材も増加してきた。さらに、成果につながる活動となるためには、明確なビジョンと方策を共有することが不可欠である。

文部科学省産学官連携コーディネーターは、大学の最前線の研究活動に接しながら、将来必要とされる社会のニーズに対応できる複合的な課題とその解決手段の発掘に努めるべきである。

コーディネーターは、グローバルな観点に立った「広域コーディネーター」の視点でPDCAのサイクルを回す活動をする必要がある。

#### ☆コ-ディネーターの一言

明星大学は、歴史も比較的浅く大きい大学でないが、貴重な知識の蓄積を持ち、地域から期待されている。社会に役立つためには、欠点を補完する連携の必要性を改めて認識した。